

5

華岡青洲の「紅毛外科集」と
京都におけるオランダ流外科の修業

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

華岡青洲（以下「青洲」）は、江戸時代後期においてわが国の医学界に大きな足跡を残した。在世中の門人も1000人を超え、彼の医学思想は彼らに大きな影響を与えた。1923年に呉秀三が「華岡青洲先生及其外科」を上梓して以来、これまでに数百篇の青洲に関する研究論文が発表されているにも拘わらず、京都における彼の医学修業に関しては不詳の点が多い。呉の研究によって、青洲は京都において1782年（何月か不明）から1785年2月まで3年間学んだとされ、仁井田好古の撰になる「華岡青洲墓誌銘」には、師として桃谷華洲、山田静斎、鈴木蘭園、吉益南涯、そして大和見水（「見立」の誤り）を挙げている。演者は2013年の114回学術大会で、京都の岩永貞吉もオランダ流外科の師の一人であることを報告した。

青洲の最大の業績が麻沸散（湯）を投与しての全身麻酔下における選択的外科手術であったことを考慮すると、青洲の京都におけるオランダ流外科の修業が非常に重要な意義を持っていることが理解されるが、青洲が1782年から1785年2月までの京都における3年間の遊学期間中、教養を学び、内科を研修し、オランダ流外科を修業した期間に関しては全く不詳とされてきた。大阪市史編纂所所蔵の青洲自筆とされる「紅毛外科集」は中野操博士旧蔵の写本（1冊）である。2012年に和歌山市立博物館で開催された「特別展 華岡青洲の医塾 春林軒と合水堂」に出展されたことはあるが、その詳細な研究は中野博士によっても行なわれていなかった。今回、演者は「紅毛外科集」を詳しく調査して、青洲の京都におけるオランダ流外科の修業に関して重要な知見を得たので報告する。

「紅毛外科集」は茶褐色の表紙で、四ツ目綴じ。大きさは23.5×16.5 cm、全87丁の写本である。表紙に題箋はなく直接「紅毛外科集」と墨書されている。無辺無界で、半丁に15行記されている。1丁表の冒頭に内題「紅毛外科集」とある。目次はないが、内容を示すと「紅毛外科集」、「紅毛外科雑方集」、「紅毛和解集」、「金創仕掛ノ事」、「紅毛外科油集」、「紅毛外科膏薬集」、「紅毛外科膏薬集」、「紅毛外科十七集」である。「紅毛外科十七集」の末尾に次のような識語が記されている。

天明四年歳次 辰春二月廿有六日 華岡震 於長安旅舎謄写終業 原本者奈良林氏之所蔵也

まずこの筆跡について検討した。とくに注目したのは「華岡 震」である。自分の署名は経年の変化が少ないからである。これを青洲自筆の「丸散便覧序」、青洲が1795年再上洛して書写した「阿蘭陀流外科伝」の署名と比較したところ、これら3史料の「華岡 震」は同筆であるが、「乳巖治験録」の末尾の「華岡 震」とは異筆であると考えられた。「紅毛外科集」は次の3点において重要である。第一は青洲のオランダ流外科の修業が天明4年2月頃から始まったことを示す。したがって、青洲は帰郷するまで約1年間オランダ流外科を学んだことになる。その後の外科医としての青洲の活躍を考慮すれば、1年は余りにも短期間であるという評価もあろうが、才能のある者にとって期間の長短は問題ではない。第二は青洲が学んだ外科は間違いなくカスバル流の外科であったことが実証されたことである。青洲自身が自分の学統を語ることは稀である。第三はこの「紅毛外科集」はカスバル流外科を伝える外科の写本中、西流外科を伝える「紅毛外科書」の系統の写本であることが判明した。以上についての詳細を報告する。